

特集

「私」を生きよう

自分の生き方をみつめるより、
誰もが私らしく生きたいと思つてほしい。
今回の特集では、女だから、男だからといった性別による

固定的な考え方にとらわれることなく、自分の可能性に向かって、
それぞれのライフステージで「私」を
生きていく方々をご紹介します。

●●● ネットワークを築く

母親だって社会とつながっていたい。
社会参加が私を生きる大きな力になります。

加藤恒さん
(30代)
子育てネット
ワーク代表



「母」 親になったとたん、自分の生き方をあきらめてしまっている女性って、案外多いのではないですか」

自分の過去を振り返り、こう指摘するのは、「さいたま市子育てネットワーク」代表の加藤恒さん。加藤さんもこの会を立ち上げる前は子育ての不安を抱え、自分の生き方に自信の持てない毎日を送っていたといいます。

「いい母親になることが人生の最大目的になっていました。母親としての役割を抱え込むあまり、自分を生きるこの大切さを見失っていたような気がします」

そんなとき、育児の自助グループで知り合った仲間たちとはじめたのが、子どもを持つ親同士の仲間づくりや助け合い、地域にあらたなコミュニティを築くためのネットワークづくりでした。

「一般のサークル活動と違うのは、自分のためだけでなく他のメンバー、そして地域のために活動をする」とした、一歩進んだ社会参加のスタイルにあります」

この活動を通して、ようやく自分を肯定できるようになったという加藤さん。「いまはまだ母親中心の活動ですが、子育てしている男女が社会の様々な活動にかかわれる、そんなコミュニティを築いていきたいですね」

●●● 男女の職域にとらわれない

子どもとふれあう毎日は感動の連続。
この仕事を選んだよかったと思います。

村上一暎さん
(20代)
保育士



「男」 女の職域にとらわれない、個性を活かし自分のやりたいたい仕事にチャレンジすることは、私を生きるための第一歩です。

「子どもとふれあう保育の仕事の素晴らしさに感銘し、この職業を選びました」と語る村上一暎さん。現在、市の八王子保育園で保育士として働いています。一昨年は5歳児を、昨年は1歳児を、今年はず2歳児を受け持ち、オムツ替えや食事の世話から外遊びまで、ま

に保育に必要な仕事はなんでもこなしてきました。彼の仕事を3年間見てきた時田園長は、彼のバイタリティーあふれる行動と発想に拍手を送っていました。

「子どもは保育士が女性であっても、男性であっても、自分のことをしっかり受け止めてくれる人になつくものです。その証拠に、彼の周りにはいつも子どもたちでいっぱい。これは彼の個性そのものに魅力があるということだと思います」

しかし、まだまだ保育の分野で活躍する男性はごくわずか。現在、市立の保育園で働く男性保育士は、村上さんを含め5名です。

「人間形成の大事な幼少期を共に過ごす責任ある大変な仕事ですが、保護者の方と一緒に成長を感じあつたり、子どもたちのキラキラと輝く瞳をみるたび、この仕事を選んでよかったと思います。とてもやりがいのある仕事なので、ぜひ男性にも保育の素晴らしさを知ってもらい、多くの仲間が出来ると思います」

●●● 非営利という働き方

いろいろな働き方があつてもいい。大切なのは社会のなかで生きる場所があることだと思います。

根本敏子さん
(50代)
ワーカーズ・コレクティブ代表



「や」 りがいと収入に結びつく働き方がしなかったという根本敏子さん。安全な食材を用いた手づくりの仕出し弁当を販売する、ワーカーズ・コレクティブ「旬」の代表として働いています。

資し、対等な関係で運営・管理する事業体。地域に必要な社会的サービスを提供する労働の場として、いま

注目を集めています。

「結婚後、子育てと家事という生活に閉塞感を感じ、PTAや地域の役員を引き受けたりしていたんですが、満足しきれない部分がありました。そんな気持ちを満たしてくれたのが、ボランティアでも利益優先でもない、ワーカーズ・コレクティブという働き方でした」

今年で10年目を迎えるという根本さん。家庭と両立しながらここまで続けられたのは、自分で働き方を選べたことが大きかったといいます。また、当初、趣味の世界としかみていなかった夫も、いきいきと働く姿をみて、徐々に理解を示すようになりました。

「家庭では得られない、社会から認められる喜びを知りました。やはり人は、人とかかわり合いのなかでしか、自分という存在を認められないと思うのです。私を生きる」とは、社会のなかで自分の生きる場所があることだと思います」

●●● 地域とかかわって生きる

肩書きのないつきあいから
仲間の輪が広がりました。

高橋一三さん
(70代)
おもちゃの
お医者さん



「仕」 事中心に生きてきた男性にとって、定年後をどう生きるかは大きな課題です。

「本当にやることがないというのは辛いものです。そこで、何か地域の役に立つことを始めたいと思ったわけです」という高橋一三さん。とはいっても、これまで仕事一筋に生きてきた高橋さんにとって、地域とのつながりはほとんどなく、どうしたらいいかわからずじまつた。そんなある日、妻に勧められ障害者の施設のおもちゃを修理するボランティアに応募することに。

「照れもあり、はじめは気乗りがしなかったんです。でも、もともと物を作るのが大好きで孫のおもちゃなども修理していたので、やってみることにしました」

ところが、いざ参加してみると、高橋さん同様、機械いじりが好きな人、工作の得意な人、ITの専門家など似たような趣味を持つ人たちが集まってきました。

「これがとても楽しくて。去年の4月からはこの仲間たちで、一般向けの「おもちゃの病院」も開設し活動しています」

ボランティアを通して得られたことは「肩書きのないつきあいの楽しさ」だといいます。「定年後の生きる場所に、好きなことをいっしょにやれる仲間がいるというのはとても幸せなことですね」

通信員 レポート

Q あなたにとって「私」を生きるとは？



◆「私」自身を大切に生きること。そのためには、人生のあらゆる選択肢を自分の意思で選び、自己責任において実行していくことだと思います(荻野瑛子さん) ◆自分の内側にある人生の課題(ワークとライフの両分野)をなしていくこと。経済的にも自立していれば持続性があると思います(高尾まゆみさん) ◆定年後こそ、自分を生きる最良のときだと実感。夫婦がそれぞれの生きがい認め合い、互いの夢の実現に向かって協力し合うことが大切だと思います(相馬匡さん)

Q 「私らしく生きられるまち」に していくのに必要なことは？



◆市民一人ひとりが、自分の生き方に対する「選択権」を持つことが必要だと思います。また行政もこうした市民の意識啓発を促す機会をつくっていただきたい(江島智子さん) ◆誰もを認める気持ちを、誰もが持つことだと思います(長岡和子さん) ◆次世代に向けて、自分らしく生きることの大切さを伝えていくことが必要。不透明な時代だからこそ、一人ひとりが自分の生き方を問いなおしてみることが大切ではないでしょうか(伊藤仁実さん) ◆高齢化が進むなか、定年後の生きる場所が地域にもっとあつたらいいのでは。様々な経験を持つ高齢者の方がもっと活躍できる場や機会を設けてほしい(佐久間美希さん) ◆誰もがその人らしさや「個」を尊重し合えるようになること。社会の一員として「調和」のとれたまちにしたいという意識を持つことだと思います(小澤千佳子さん)